

われらが青春の挽歌

岡澤敏男

(昭和20年卒)

私たちの中学時代は、まるで出口の見えないま
ら暗な長い戦争のトンネルを彷徨していた、とい
つてよい。

直き片付くと、のん気に考えていた日中戦争も、
ようやく泥沼化が予想されだした昭和十五年の春、
私たちは中学に入學したのである。

その頃、物資の欠乏がしだいに生活を脅しはじ
め、砂糖は一カ月一人一斤だけ、マッチも一日五
本と制限されだした。やがて、冬に入ると木炭は
切符制、お米も配給制度となつて、街角では「贅
沢は敵だ」、「欲しがりません勝つまでは」のポ
スターが、やたら目につくようになった。

翌十六年、私たちは二年生に進級した。その年
の十二月八日、大本営陸海軍部発表の臨時ニュー
スで「西太平洋において米英軍と戦闘状態」に入
つたことを知り、私たちの前途に、ガチャんと、
遮断機が降ろされてしまった気がした。それから
というものは、学園も急激に戦時色に塗り替えら
れていった。黒の制服制帽がカーキ色に変わり、
野暮つたい戦闘帽にゲートル姿で登校するようにな
つた。教科にも軍事教練が巾をきかし、「我国
の軍隊は代々天皇の統率するところにぞある」で
はじまる長文の「軍人に賜りたる勅諭」を暗誦し
そこね、きついビンタをとられたりした。戦局は
十八年に入って重大さを加え、ガダルカナル島敗
退について、アツツ島やタラワ、マキン両島の玉

砕と、しだいに敗色を深めていった。

こうなると、もう落着いて授業はできなかつた。
食糧増産のために駆り出されたり、射撃場や戦車
隊演習地の造成作業などに追いまくられていった。
そして、十九年一月十八日「緊急国民動員方策要
綱」が閣議で決定された。学徒総動員令である。
学徒の勤労奉仕を法制化し、兵器廠や軍需工場へ
の長期的動員を指示するものである。

私たち五年生で編成された岩中勤労報国隊は、
五月十八日川崎市にある工場に向つて盛岡駅を出
発した。動員先は日本鑄造株式会社鶴見工場で、
見るからに肺をやられそうな、黒煙の降る、とて
もごみごみした工場街にあつた。工場の建物は鑄
造屋なので煙で汚れた、ガランとした殺風景で暗
い作業場である。作業工程は、ちようど南部鉄び
んを造るのとひとつで屑鉄などの原料を炉で溶か
し、そのどろどろしたものを、鑄型に注入して、
冷えてから砂の型を壊して製品をとり出すだけだ
である。私たちは幾つかの班に分れて、電気炉、砂
場、型場、削(けづり)場、熔接の各職場に配属
された。仕事は「習うより慣れろ」で、じきに上
手になつてオシヤカも出さぬようになった。私た
ちの作業態度が工員や会社の人たちから「岩手の
学生さんは、まじめだし、よく働くし」と激賞さ
れていた。そこはまた、気のいい岩手人の人柄で、
ほめられればなおさら精を出すという具合で、こ
の工場の生産指数は鰻登りに上つたという。会社
の河野勤労課長は「皆さんの労を報いるために、
軍需相に上申し、褒賞状をもらうようにします」と
長い顔の相好をくずした。

しかし、私たちの欲しいのは大臣賞ではなかつ

た。生産増強に協力すれば、正月を郷里で迎えさ
せてやる、という外交辞令を信じて精を出してい
たのである。そうした、張りつめた純な気持を踏
みにじられたと知つたとき、私たちの怒りは、思
わぬ方向に曲折していった。

十二月のある夜。寮の広間に全員が集合して監
督にきておられた牟岐先生から「正月帰郷は何か
の聞き違いであろう」と言いきかされたのである。
このひと言で私たちは会社の策略を悟つた。私た
ちは帰郷というニンジンに躍らされた馬車馬だつ
たのである。翌日、私たちは職場に出かけていつ
たが、作業をしなかつた。ただぶらぶらして一日
を暮した。翌くる日も、その翌くる日も。やがて、
工員たちは私たちの行動の異常さに気づいて、戦
前にあつたストライキのこと、煙突男の話などを
語つてきかせる者もあつた。会社は終戦を見越し
て、秘かに平和物資を生産しているという意外な
囁きも耳にした。私たちは私憤、公憤をこちや交
ぜにしながら、しかし確信をもつて団結し、怠業
をつづけた。

そしてある日のこと、食堂に全員が集つて、会
社側と対決することとなつた。河野課長が例によ
つて長い顔を一層長くして私たちの前に立つて言
い出した。

「皆さんは、なぜ仕事を怠けるのですか。」

「私たちはお国のために生命をかけて働きにき
たのだ。軍事用物資を造るためである。それなの
に、会社は平和物資を秘かに造つているというで
はないか。そのようなものに手を貸すことはでき
ない。」

と私たちは力をこめて反論した。

課長は、眼鏡を外してハンケチでまぶたを抑えるしぐさをした。そして少し声を落して弁解した。「それは誤解である。だれが皆さんにそのようなデマを申したか知らないが、そういう事実はない。会社を信用してくれ。」

私たちは、さらに正月帰郷の裏切りの責任を激しく追求しているとき、血相を変えて牟岐先生が、どなりこんできて「みんな、直ぐ職場に戻りなさい。さもないと全員退学処分をとります」と威嚇した。私たちは無言で対し、瞋恚をこめた白い眼を向けて、いつまでも立っていた。

その後、私たちは戦術を転換して、仕事をするふりだけはしよう、ということになったが、会社や先生に対して、もはや埋めがたい空白ができてしまったようだった。

正月は、寮で三、四枚のお餅が支給され、郷里の正月のご馳走を思い浮べながらむなく過ごしたのであった。

十六回生の思い出

福士俊朗

(昭和二十年卒)

私たち十六回生は、まったくの戦中派である。中学一年のとき太平洋戦争が始まった。そして、四年生の六月から勤労動員で学校を離れ、二十年四月、動員先の川崎で大空襲をうけて焼け出され、私たちの中学時代は終わった。同級生には特別幹部候補生や予科練で軍隊に行ったのがおり、卒業式は動員先の川崎の軍需工場の集会所で、他校の生徒といっしょに「海行かば、水漬^{づか}く屍^{かばね}……」を歌

った。今の中、高校生には、とうてい想像もつかない十代の青春であったのである。

私たちは勤労動員ではじめ久慈の山に、続いて川崎の工場に行った。

久慈に行ったのは、昭和十九年六月。今の長内町(当時、長内村)の山に砂鉄の鉱山があつて、山を切りその鉱脈を出すのが私たちの仕事であった。来る日も来る日も、毎日、トロ押しの連続なのである。山にスコップを入れ固いところは、はしで切り崩していく。それをトロに積んで捨て、場まで運んで行き、帰りは上り勾配をトロを押し上ってくる。そしてまた山を切り崩し、トロに入れ捨て場に下っていく。これが、六月から、七八、九月まで続いた。私たちは、雨が降ってくればよいと願った。雨が降れば作業は休みである。しかし、不思議と雨は降らなかつた。毎日熱い夏の太陽が赤々と照りつけ私たちは皆背中が真黒になつた。

山の秋ははやく、とんぼが群をなして夕暮れの空を飛び交うようになった頃、誰言うともなく「今度は川崎の工場にやられるぞうだ」という噂が立つた。私たちは皆はやくここを引き上げて川崎に行きたいと思つた。「川崎の方は、ここより飯めしがいいぞうだ」というのである。実際、毎日の単調なトロ押しの生活と、大根入りの飯、わかめの塩汁(味噌は入ってはいたがごくわずかで、皆そう呼んでいた)には、もうすっかり倦きていた。だが、川崎に行く日はなかなか来ず、私たちはもう何も考えず、それこそ黙々と甲虫のように動き廻り、トロを押ししていた。そして、ようやく長内の山を下り盛岡に帰つたのは、それから大分たつた

九月も半ば過ぎてからのことだつたと思う。

それから一ヶ月後、私たちの行先は、やはり川崎であつた。確か十九年十月の二十四日頃、今で言えば集団就職列車のように、やはり東京川崎方面に勤労動員で向う他校の生徒といっしょに、臨時列車にのり盛岡を離れたのである。

私たちが行ったのは、川崎とは言つても川崎市の北部、東横線の日吉駅に程近く、私たちの泊つていた寮から麦畑ひとつ隔てて慶應予科校舎のある日吉台があつた。(空襲をうけたとき、この日吉台の横に掘つてあつた壕に待避し集結したのである。)工場は、三菱系の川崎機器という会社の工場であつた。私たちの仕事は、その中の鑄造関係の作業であつた。私たちが作つていたのは、上陸用舟艇エンジンのヘッドとかで、材料の鉄を熔鉱炉で溶かし、木型でとつた砂の型に流し込み、冷えたところで中身をとり出し砂を除きそれを次の工程に送る。それが仕事であつた。私たちは、この一連の工程のなかのいろいろな仕事に配置された。熔鉱炉のなかに鉄材とコークスを交互に入れ、それを溶かしていわゆる「湯」を作る仕事、鑄型を作る砂そのものを作る仕事、鑄型を作りそれに「湯」を流し込む仕事……だが、配置されて二、三ヶ月、昭和二十年に入ると、材料があつてもコークスがなく、コークスが来れば材料がないといつた調子で工場に出ても仕事がなく、一日中ぶらぶらしている日が多くなつた。私たちは冬の陽だまりでぼそぼそと語り合ひ、敗戦の色の次第に濃くなるのを知つた。

そんな日の続いたある夜、B29の編隊がいくつもいくつも頭上を通り過ぎて行つた。とても十機

や二十機でないのである。やがて、東京方面の空が、端から端までまっ赤に燃え盛り焼け焦げるのを見た。三月十日の東京大空襲だったのである。

四月に入つて、私たち岩中報国隊は（懐しい名前である）、会社の寮に残っている者、約百人中二十人前後になつていた。動員中からだを悪くしたり軍隊に行つたり理系の大学に行つたりして、こんな人数が相変らず仕事のない工場に通つていたのである。空襲警報が発令されたとき、「なアに、今夜も東京だべ」というわけではじめは皆のん気に構えていた。皆、誰も床から起きるものにならなかつた。ところが、どうもそうはいかなくなつてきた。その夜こそ、私たちがやられる番だったのである。以下同級生のY君の当時書いた記録をたどつてみる。（文中、新発田中岩商とあるのは、新発田中岩商が泊つていた所、という意味。私たちが宿泊していた寮はすごく大きく、多くの中学生、一般の徴用工合わせて千人ぐらいがいたように思う）

『待避ト同時ニ食堂裏ノ壕ニ入り敵機ノ行動ヲ監視シテイマシタ。情勢マスマス悪化シ会社ト思ハレル方ハモウ火ノ海ト化シ応徴士ハ出動シ寮ノ空気少シ落着ク欠イタ。ソノ時敵ハ新発田中ニ焼夷弾ヲ投下、見ル見ルウチニ火ノ手ハ廻ツタ。此レハ一刻ヲ争フト思ヒ新発田中ノ消火ニ努メマシタ。シカシ、マタ二回目ノ爆撃ニヨリ焼夷弾ハ食堂付近ニ落下、急イデ事務所ノ方ニ退避シタガス引キ返シ岩中隊五班付近ニテ消火栓デ頑張りマシタ。火ノ手スデニ岩商ニ廻リ窓ヨリドンドン燃エテイルノデ窓カラ入りリッ・ク・サツ・ク出シマタ返シテ消火ニツトメタ。O君S君ト共ニイルト空

ガスゴクヒユウヒユウト鳴リ爆発スルノデO君ト一緒ニ岩中六班ノ前ノ壕ニ入ル。瞬間、三中隊ニ爆弾ガ落下、ト同時ニ焼夷弾ハ全寮ニ落ち、遂ニ壕ノ両入口ニモ火ガ来テ一時ハ駄目ト思ヒシガ、ヨウヨウ出テ航空研究所ノ前ヨリ東横線方面ニ逃ゲタ。ソレカラ火ガヨウヨウオサマツテカラ寮ニ帰り又入口ニ引返シ岩中隊ヲ探シタガ見エズ。空襲警報解除ト共ニ日吉台ノ穴ニ行ツテ本隊ト会ツタ。』

幸い、今思つてもほんとうに幸い、怪我をした者、行方不明になつた者は誰もいなかった。全員無事で文字通りかすり傷ひとつ負わなかつた。二十年四月十五日夜のことである。

爆撃で完全に工場の機能が麻痺してしまつていふものにもかかわらず、会社では、なかなか私たちが帰してくれなかつた。山中先生は「こんなところに長くいたのでは犬死だ。」と言われた。そして、全員特別幹部候補生を志願するというので、会社はやつと帰郷証明書を出してくれた。当時は、これが無ければ勤労働員生は帰郷できなかったし、第一、汽車の切符を買えなかつたのである。焼け出されて三日目だったか四日目だったか、やつとの思いで川崎を後にし、一夜、麻布の三田さんの家に全員泊めていただいた。S君M君それに私が切符を買いに行き、岩中報国隊の盛岡行団体券を手に入れたときは、ほんとうに嬉しかった。三人手放しで喜んだ。これで帰れる、心からそう思つたのである。

勤労働員・その断片

工藤次男
（昭和22年生）

戦雲低く垂れ込めて……などといった詩的な感概に浸るような時代ではなかつた。そんなゆとりなど、さらさら縁遠い一時期だった。

昭和二十年二月二十四日、深夜の盛岡駅から、一連の臨時列車が動き出した、零時十二分であつた。

この臨時列車には、われわれ岩手中学第三学年の勤労働員約百五十人が分乗していた。前年の十月一日から四十日間の久慈製鉄の砂鉄掘り動員に続いて、二度目の長期学徒勤労働員に駆り出されての雄々しい立ちであつた。この雄々しさ、しかし、顔面通りとは決して言い得なかつた。もちろん、スチームも、石炭ストーブすらもない“冷凍列車”である。それぞれの釣り鐘マントにくるまって寒気をしのぐとあつて土気のがらないうことおびただしい。睡魔が襲つても、すぐ寒さに邪魔されて、いつまで経つても眠りは浅く、ゴトンゴトンという気ぜわしい車輪の音にかき消されてしまう。まどろむいとまもなかつた。

めざす目的地横浜は、実に遠いんだなあ、と正直言つて心細い思いに突き落とされてきた。あつちへひと休み、こつちへ一時停車が災いして実際に泊三日を費して、やつとのこと、目的の横浜は磯子区、金沢八景にたどり着いたのは、もう、「日本製鋼所、横浜製作所東寺前寮」の表札の文字が、薄暗がりにやつと見えるころあいになつて

いた。

翌日から、軍需産業の一角、「B29」を落とす三十ミリの機関砲作りが始まった。この生活は、終戦の八月十五日まで続いた。

この間、三月末には寮の廊下で修業式が行われた。どんよりとした裸電球の下で、一人一人名前を呼ばれて、四年生への進級を口頭で言い渡された。修業証書があるはずもない。愛称テラさん（故人になられたが、頭のツルリとはげ上がった高橋与平先生、私らの担当、英語を教えた）の、多少気取って、口をへの字に曲げて神妙な言い回しで進級を告げる口調が、今も懐かしくよみがえってくる。

ここでの生活で、最も閉口したのは、腹のすくことだった。なにさま、育ち盛りの面々である。それが、朝、昼、晩と、木造りの小さな弁当箱にサラッと一杯だけ。夜食といえは、雑炊（といっても汁に御飯粒がポチポチ浮いている）がやはり一杯。とてもじゃないがブツ倒れそうな毎日だった。だから、食堂にかけてつけるや否や、だれもが目の色変えて、少しでも盛りのいい場所を探し出そうと、ものすごい形相であった。浅ましいなどと悟ってはおられない。正に「人間以前」の姿だった。そんな具合だから、同じ部屋の者が休暇で帰郷したりすると、土産には必ずのように銀ビカの米や、ふつくらしたモチを持って帰る。そうなたらたらまらない。早速、炊飯、先を競っての食い放題。食い過ぎて、腹の虫もびっくり仰天。夜半に便所でのピーピー列車や小間物屋の開業（失礼!!）など、ひどいものだった。それでもなお、

食い続けようというシタタカナひもじきでもあったのである。空襲の襲来もひんぱんだった。

着いて間もない三月十日の夜の東京大空襲（江東地区全域）は、夜目にもすさまじいものだった。ウんカのように攻めまくるB29を迎えうつわが高射砲隊の活躍振りに、他愛もなく歓声をあげた。空襲下だということも忘れて、防空壕の上にかけて登り、一機また一機撃墜されるたびに、手を打ち、躍り上がってその勇ましさに感激したものである。戦いに酔いしれた、思えばひとときの砂上の喜びであることも知らず……。

防空壕と言えは、夜半の空襲警報発令に、眠いさなかをたたき起こされ、級友たちと一緒に防空壕にかけ込んだまではよかつたが、解除になるまでに、ついウトウト。はっと目がさめた時は、壕内にはだれもいなかった。とつくの昔解除になり、みんな部屋に戻っていた。仕方なく、一人トボトボの足取りで部屋に戻り床へ。その時の妙にうら悲しい思いは、ふと古里の親兄弟を思い起こさせたものだった。

またもう一つ、防空壕での思い出。日中工場で働いているさなかなの空襲警報。工場内の防空壕は満員だったのか、われわれ勤労報国隊は、いきなり駆け足を始めた。一体どこへ連れて行くのだろうと、不審に思ったが、走る外なかった。もの十分も走ったろうか、やっと山際の岩石をくり抜いて作られたトンネル式防空壕にたどり着いた。その時早く、かの時遅く、空襲警報はすでに解除になっていた。今で言うナンセンス。よくも走っている間、米軍機の目にとまらなかつたものだと思つた。今思つて冷汗。しかし、その時は夢中

だった。

ただ、走る途中、小川のほとりで草を摘んでいた母子の姿が、今も強烈によみがえってくる。古里を懐かしんでいたためか……。あんな空襲下、そんな平和な風景のあらうはずもないのに……とも思う。

また、何度目かの、工場内での空襲警報で、何度目かの工場内の防空壕に避難した折りのことである。もう五月の末になって、戦局も沖繩決戦が熾烈を極め、ヒタヒタと敗色がたちこめるまでに至っていた。防空壕に身を潜めながら「もう日本は敗ける。このあとどうなるだろう」と、不安な思いを語り合いお互いに自分のひざ小僧を抱え込んだことがまるで昨日のことのように思い起こされる。

そして、私のエスケープの日が来る。七月を迎えたある日の夕方、電報が一通私の手に届けられた。「ハハキトク、スグカエレ、チチ」あの元氣だった母が……とわが目を疑った。正に顔面蒼白の思いで、アタフタと帰り支度をした。折りよく、級友の飯岡君と駒井君の二人は休暇をとって帰るところだ、という。同行することにした。

駅に走って、切符を買って求めた。しかし、切符も一日に何枚という限られた時代だったので、盛岡行きは売り切れ、飯岡、駒井の両君は辛うじて白河までの切符を手に入れたが、私の前でそれも売り切れた。「いいさ、この白河までの切符二枚で、三人なんとか帰るさ」という飯岡君の言葉に励まされて上野へ。飯岡、駒井君の二人は先に改札口を出る。私は改札口の一歩右端へ走る。飯岡

君がきて、先に渡しておいた私の帽子にハサミの入った白河行きの切符を入れて渡す。無事通過、列車に走った。しかし、二人にはぐれてしまった。仕方なく通路にまでひしめいている混雑な列車の連結部分に座り、覚悟を決めた。ガタンゴトンと、連結部分の揺らぐさまを見つめながら、初めてキトクのハハの身を思った。ウソであつて欲しいとかすかな願いをこめて……。

ただ駒井君だけが正直に白河行きの切符を出して乗り越し分の三倍の料金を取られた。なにか、自分だけがピタ一文払わずに人サマの切符で白河まで、残りはサツマノカミ、妙に後めたさを感じたことを覚えている。

炎の診断書を作ってもらい、それを横浜に送り、とうとうエスケープのしつ放しであった。終戦。荷物をとりに行くのもおつくだつた、横浜には戻らずじまいで終つた。そうしたら無一の親友だつた藤原司郎君らが、私の荷物までちゃんとこんぼうして送ってくれた。最後までいい加減なぐうたら“勤労学徒”だつたようである。

なにか学業には無縁の、わが中学時代の一コマは、しかしそれゆえにこそ、今も生き生き私の全身を駆けめぐるのである。

ハハキトクは、父の打ったニセ電報だつた。「腹が減つた、体がまいりそうだ」と連日のように書き送つた手紙を読み、ふびんに思った父の大芝居だつたのである。

このあと、私は地元の医師を訪ねて、ロクマク

盛岡に着く。私は汽車通学で使つていた期限の切れた定期券の日付の部分の部分を隠して通過、飯岡君は知り合いの駅員に「やあ、しばらく」でスィー。